

隣人愛がバックボーン



「オルガンの演奏に誇りを感じた」と谿博子さん



「女学院にぞっこんです」と中島千恵さん

満喫しました」

87年5月3日。朝日新聞阪神支局(西宮市)に散弾銃を持った男が侵入し、記者が殺傷される事件が起きた。1週間前、中島さんは展覧会の打ち合わせで支局を訪ねていた。「身近なところで起きた事件に、ただ驚いた。一つの価値しか認めない人が違う価値の人を暴力で押さえつけるテロは、その後世界で増えている」

亡くなった記者を悼み、阪神支局で年一回、「平和と鎮魂」がテーマの展覧会を開いている。「人それぞれ違う価値を認めることが、平和の第一歩。女学院の『愛神愛隣』(神を愛し、隣人を愛す)という教えにもつながる。女学院で培った精神性が、全作品のバックボーンになっている」

子さん(42、93年卒)は、流れるパイプオルガンの音に魅了された。朝、音楽が始まるというのが心地よかった」

在校中に、オルガンを演奏する役目も経験した。「間違えたらたいへん。責任重大でした」。緊張しながらもパッハのフランス組曲などを弾いた。「音楽をやっている、ということを自信をもってみんなに伝える機会になりました」

神戸女学院大学に進学したころには、ピアノを仕事にしようと決めていた。大学院に在学中、あるコンクールで入賞したことをきっかけにフランス・パリに留学。大好きな作曲家のドビュッシーの母国でもあった。

「フランスでは、先生も生徒たちも『この曲を弾けて幸せ』と楽しそうに演奏していた。レッスンは怖いもの思っていたので、新鮮でした」。帰国後、ピアノを続けることができ、弾ける場所があることに感謝するようになったという。

昨年、ドビュッシーの曲を集めた作品でCDデビューを果たした。「収録中は、弾けて幸せという時間でした」

ドビュッシーの曲を中心に演奏するコンサートも定期的に開いている。全曲制覇することが、今の目標だ。(中塚慧)

神戸女学院には、制服がない。西宮市に住む洋画家の中島千恵さんは、1940年代後半から中高時代を過ごした。入ったところ、先生から「校章を必ずつけるように。それだけが規則」といわれたことが忘れられない。「土日も外出する時も校章をつけていました。それが誇りでした」。大切に保管していた校章は、娘が中学部に入學した時に譲った。

中高では絵画部に所属し、油絵を描いた。演劇研究部が講堂で芝居をする時に、背景やポスターの絵を担当したことも。「学校生活は、100%

毎朝の礼拝の時間が、心に残っている卒業生は多い。ピアニストの谿博